

ブレース・パスカル『プロヴァンシアルの手紙』の表現形式(二) —対話—

森 川 甫

はじめに
表現形式 手紙と劇

はじめに

『プロヴァンシアルの手紙』¹⁾はその題名のとおり、まさに手紙であるが、「第1の手紙」から「第10の手紙」は、また、対話の形態をとっている。ひとり台詞よりも二人の対話のほうが、一般に、いきいきとしたものになりやすいが、この二人の登場人物がそれぞれ異なった思想を代表すると、さらに生氣ある豊かなものとなるであろう。この対話は読者がその観客であり、また、審判官である論争であって、そのコントラストにより、見解の違いが明確に示されるのである。

1) 対話

対話者

『プロヴァンシアルの手紙』の対話において、イエズス会士と対話するのは、モンタルト²⁾自身である。彼は、神学のことはほとんど分からない典型的なオーネットムとして姿を現し、そして、現在行われているソルボンヌ³⁾の争いについて大きな好奇心と追究心を持っている。パスカルとの対話者となるイエズス会士は、「人の良い神父さん」である。「イエズス会士の中でも誰よりも有能とされている一人」であり、また、クロード・ド・ランジャンド神父⁴⁾がモデルとされている。このイエズス会士はパスカルのマスクしか見ていないが、読者はマスクと本当のパスカルを見ている。このほかナヴァール学寮⁵⁾の博士、ジャンセニスト、モリニスト、ドミニコ会士らが登場する⁶⁾。

「第1の手紙」から「第3の手紙」では、「第4の手紙」から「第10の手紙」よりも対話がずっと少

- 1) *Les Letters Provinciales* (『プロヴァンシアルの手紙』のテキストとしては、Pascal (Blaise), *LETTRES A VN PROVINCIAL*, Edition princeps, 1656-1657.
—*Oeuvres complètes*, Paris, Hachetts, (Grands Ecrivains), éd. Brunshvicg, 1904-1914, 14 vol. in-8°, (略号 GEF. ローマ数字は巻数を表わす).
—*Les Provinciales*, Paris Garnier, éd. de L. Cognet, 1965, 503 p. in-8°. (略号 LC.) を主として用いた。また、邦訳では、『パスカル著作集』Ⅲ, Ⅳ, 田辺保訳(略号 T.) 及び、『パスカル全集』第二巻所収の中村雄二郎訳を参照した。本書の日本語題名は、状況を考慮して、『小さな手紙』、『田舎の友に宛てた手紙』、『プロヴァンシアルの手紙』を与えている。ちなみに、*Petites Lettres* は論争初期に用いられた呼び名で、やがて、*Les Lettres Provinciales* が定着してくる。ソルボンヌにおいて、イエズス会を中心とする勢力から非難、譴責されたポール・ロワイヤ修道院のアントワヌ・アルノーを弁護して、ブレース・パスカル(1623-1662)は、1656年1月から1657年3月の間、18通の『プロヴァンシアルの手紙』を執筆し、アルノーを異端とするイエズス会の非難の不当性を訴えた。当時、イエズス会と、ポール・ロワイヤ修道院を本拠とするジャンセニストは恩寵と道徳の問題に関して激しく対立していた。cf. 拙論「プロヴァンシアル論争の起源と経過」(関西学院大学社会学部紀要第16号, 1968年)
- 2) 『プロヴァンシアルの手紙』の著者、ブレース・パスカルの筆名である。1657年3月、合本が出版されるが、その題名にあらわる。*Les Provinciales ou les lettres écrites par Louis de Montalte à un Provincial de ses amis et aux RR. PP. Jésuites, Sur le sujet de la morale et de la politique de ces Pères*. Cologne, 1657.
- 3) バリ大学神学部の通称。当時、神学的著作の正統性を審議し、判決を下す機関となっていた。
- 4) Le P. Claude de Lingende (1591-1660).
- 5) バリ、カルチエ・ラタンにある学寮。cf. 拙論「ブレース・パスカル『プロヴァンシアルの手紙』の表現形式(一)」注19(社会学部紀要 第69号, 1994年)
- 6) cf. 拙論前掲書「プロヴァンシアル論争の起源と経過」

なく、モンタルトは情報提供者、あるいは、弁護士として姿を現している。「第4の手紙」から「第10の手紙」は、ほとんど全部対話によって語られている。「人のいいイエズス会士の神父さん」はイエズス会士の神父自身の言葉とモンタルトのコメントによって諷刺される。この「神父さん」の人物像は、イエズス会の神学の徹底した擁護者であり、また、イエズス会の神学の熱心な教育者である。「人のいいイエズス会士の神父さん」は非常に寛大であるが、この場合、人の弱味にこびている。

イエズス会の神学の徹底した擁護者は、「現実の恩寵」で問い詰められて言う。

私どもの神父たちに話しておきましょう。何とかよい答えを見つけてくれるでしょう⁷⁾。

「意志の導き」⁸⁾ についてモンタルトから強い反論を受けて言う。

「これは気にさわることを申されますな」と、神父は言った「私は、根拠のないことは何も言いませんよ。どっさり引用できますからね。その数と、権威と、理性とには、あなたも驚いて目を丸くなさるでしょうよ」⁹⁾。

イエズス会の良心例学者¹⁰⁾の著作から次々と引用する。

わが会の神父がたによれば、悪口をいわれたら殺してよいそうです。レシウス¹¹⁾は、先に引用

した箇所でこう言っています。そして、多くの神父がた、とくにエロー神父¹²⁾の言うところもこれと一字一句まったく違いありません。(…) どうですか。理路整然たるものじゃありませんか。議論のための議論ではなく、立派な証明になっています。さて、最後にかの偉大なレシウスは、(…) なにか不審な挙動、人を侮る傾向が見えたら殺してもよいとさえ教えています¹³⁾。

イエズス会の神学の熱心な教育者は、モンタルトに「現実の恩寵」¹⁴⁾ の意味するところを教えてくださいと乞われて、

「喜んで、いたしましょう」と神父さんは言った。「私は、向学心のある人が好きでしてな。まず、定義しましょう。『現実の恩寵とは、神がご自身の意志をわれわれに知らしめ、それを実行させようとして与えらる靈感』のことをいう」¹⁵⁾。

聖書や教皇や公会議に背く、とモンタルトから指摘されて、

この間に一致があるとわかっていただくには、もっと時間がかかりましような。あなたがいつまでも、不十分な知識のままでいられのを放っておくわけにはいきません。明日もう一度お目にかかって、この点についてさらにはっきりしたお話をいたしましょう¹⁶⁾。

7) 4^e Lettre, LC. p. 70-71, cf. T. t. III. p. 84.

8) イエズス会の道徳の主要な原則に次の4つがある。la doctrine de la probabilité 蓋然的意見の教説、la direction d'intention 意志の誘導、la doctrine des équivoques 両義論法、la restriction mentale 心内留保の4つ。cf. 注1) 前掲書。

9) 7^e Lettre, LC. p. 117, cf. T. t. III. p. 146.

10) 良心例学 casuistique は、決疑論とも呼ばれ、倫理神学の一部門を構成する。複数の道徳上の規定が同じ行為に対して相矛盾したことを命じている場合、また、具体的な個々の事例に規定を適用する場合に生じる諸問題、良心が遭遇する様々なケースについて研究する。イエズス会は人を導くため、特に熱心に良心例学に取り組んだ。スアレス、サンチェス、モリナ、エスコバル、ボオニーなど、イエズス会の良心例学者が『プロヴァンシアルの手紙』に引用されている。

11) Léonard Ley または Lessius (1554-1623) イエズス会神学者。

12) N. Héreaud イエズス会士、クレルモン学院教授。

13) 7^e Lettre, LC. p. 125, cf. T. t. III. pp.154-155.

14) 現実の恩寵 grâce actuelle は「人間が有益な働きをなすことができるように、神によって導びかれるさいに仲介の役を果たす」恩寵のこと。魂につねに内在する「習慣的恩寵」grâce habituelle と区別される。

15) 4^e Lettre, LC. p. 54, cf. T. t. III. p. 68.

16) 5^e Lettre, LC. p. 94, cf. T. t. III. p. 110.

このイエズス会神学の熱心な教育者は、「これからもどんどんお話ししましょう」と約束している。

こんどは、わが会の神父がたが、救いを容易にし、信仰を楽にするために認めておられる、快適で安楽な生活のお話をしましょう。これまでは、いろんな身分の人たち個々のケースを見てきましたから、今後は全体に通じる事柄を知ってもらおうと思います。そうすれば、あなたはもう何一つ知らないものはないことになりませ¹⁷⁾。

寛大な神父

寛大な神父に断食を守ることがなかなかできないと打ち明けると、

「そら、ここですよ。『夕食を食べなければ眠れない者は、断食する義務があるか。全然ない』。さあ、これで御満足でしょうが。」「すっかりというわけじゃありません」と、ぼく。「ぼくは、朝は軽く食事をし、夕方に本式の食事をすれば、断食に耐えられるのですがね。」「それじゃあ、次をごらんさい」と、彼は言った。「神父がたは、すべてに抜かりがありません。『夕方に本式の食事をし、朝は軽い食事にしておけるならば、どうか』」「なるほど。」「『この場合も断食はしなくてもよい。食事の順序を変更する義務はだれにもないからである』。」「ああ、何とまあ、すばらしい理由なんでしょう」と、ぼくは叫んだ。「ところで、と彼はつづけて、言った。「お聞きしたいのだが、あなたは、ぶどう酒はかなりいける口ですかね。」「いや、神父さん、そんなにはいけないんです」とぼくは答えた。「それをお聞きしたのは」と、彼は、かえした。「午前中なら、いつでも、飲みたいときにお飲みになっても、断食を破ることにならないのをお知らせしておきたかったです。(…)断食を破らずに、『のぞみの時間に、しかも大量のぶどう

酒を飲むことができるか。できる。イポクラス酒でもよい』イポクラス酒のことは私も思いつきませんでしたな」と、彼はつけ加えたものだ¹⁸⁾。

これらの対話のなかで用いられている相手をけなす手段のうち、もっとも重要なものは、皮肉である。モンタルトはイエズス会士に対してはマスクをつけているが、読者には顔を見せている状況のなかで、皮肉は滑稽さの効果を生み出す。「皮肉と滑稽さは密接に関連している。このそれぞれは、外観と実態を同時に知って気づくことによる。このそれぞれは知的な判断を要求する。批判の道具であるこのそれぞれは、また、明らかに風刺の道具でもある。皮肉のさまざまな形態を集中的に、また、入念に用いて、風刺作家パスカルはイエズス会士をえさにして、読者とともに笑うのである」¹⁹⁾。

上のように述べて、Toplis は皮肉の二つの形態を挙げている。1つは、単純な皮肉であり、もう1つは、ソクラテスの皮肉である。単純な皮肉とは、「意図された意味が使用されている言葉によって表現されていることと反対である場合の言語活動の形態である。通常、風刺とか嘲りの形態がとられ、そこでは賞賛の表現が非難や嘲笑を意味するために用いられている」²⁰⁾。モンタルトによる風刺的表現は、「イエズス会士の神父さん」には文字通りの表現のまま受け取られているが、読者には正確に翻訳されてその意味内容が伝えられる。イエズス会の神父が良心例学を長い賞賛の言葉によって組み立てると、モンタルトは皮肉たっぷりのコメントをつけ加えてそれをうち倒す。たとえば、蓋然的教えの議論がなされている「第6の手紙」では、やがて痛烈に批判されるイエズス会の良心例学者からの引用を「神父さん」が賛辞を込めて説明すると、モンタルトは言う。

教会にあなたがたのような守り手がおいでになるということは、何と幸いなことでしょう。蓋

17) & *Lettre, LC*. p. 151, cf. *T. t. III*. p. 188.

18) 5^e *Lettre, LC*. pp. 81–82, cf. *T. t. III*. pp. 98–99.

19) Patricia Toplis, *The Rhetoric of Pascal*, p.77.

20) Toplis, *op. cit.*, p.77.

然性とは、何と便利なものでしょう²¹⁾。

「第5の手紙」では、蓋然的意見について、モンタルトが言う。

まじめな話、神父さん、あなたがたの教えはとても便利なものですね。なんとまあ、自分の好みのままに、イエスともノーとも答えていいというんですか、この便利さたるやちょっとこたえられませんね²²⁾。

「ああ、神父さん」と、ぼくは言った。「これはまた、見事なまでに念入りな指示が与えられているんですね。これならもう、何も恐れることはありません。告解を聴く司祭もあえて、このために違反することはしないでしょ²³⁾」。

「なかなか、結構な言葉ですね」とぼくは言った。「この言葉で気持ちが軽くなる人たちが大勢いることでしょうよ²⁴⁾」。

ソクラテスの皮肉

ソクラテスの皮肉は、モンタルトとイエズス会士との間にとり交わされた微妙な対話の上に興味ある光を投げかけている。アイロニー（皮肉）が由来するギリシャ語は、初期ギリシャのコメディ（喜劇）の発展に密接に結びついている。アリストテレスにとっては、コメディは3つの特徴的な役割を含んでいる。つまり、道化者、皮肉な人（*iron*）、詐欺師（*alazon*）である。虚栄と高慢さの顕著な *alazon* は、元来、*iron* の敵対者であった。コメディはこの両者の衝突から生じる。*iron* は、つねに、*alazon* が彼の単なるユーモアの対象であるから、最後に勝利者となって現れる。彼の敵対者と比較すると、*iron* はいつも愚か者に見えるが、これは *alazon* の裏をかくために、彼が巧妙にたくらんだ陰謀を隠すためのおおいに過ぎない。終始、彼は状況を駆使して、単純な *alazon*

を議論の網に陥れ、そして、遂に、破綻するまで *alazon* を自己矛盾させる。このように、その起源から、アイロニー（皮肉）は巧妙さと悪巧みを前提としている。古代ギリシャ喜劇では、*iron* は、つねに幾分、道化者の特徴やマンネリズムを持っている。彼のただ1つの役割は、喜ばすことである。ソクラテスの『プラトンの対話』は喜劇の *iron* と大いに共通性を持っている。つまり、彼が無知を公言していることや見かけは彼の論敵の見解を認めていることである。しかし、ソクラテスが論敵の見解の矛盾を解明するさいに示す独特の鋭敏さは、*iron* の役割の変形したものである。この洗練のお蔭で、アイロニー（皮肉）は次第にずる賢さと道化の内容を幾分か失ない、そして、今日、用いられているような意味を獲得したのである²⁵⁾。

『プロヴァンシアルの手紙』では、モンタルトは対話において、確実に勝利し、随意に、彼の獲物を操っている、巧みな *iron* の仕事をしており、いつも無力にもわなに陥ることになっているイエズス会士は、*alazon* の役割を持っている。モンタルトは、見かけは無知であるが、実際は、より優れた知識の所有者である。良心例学に、単純に、そして、満足し切っている「イエズス会の神父さん」は、モンタルトの嘲りの対象である。彼はモンタルトが慎重に計算してしかけた質問に答えて、読者を喜ばすとともに、イエズス会士の陣営に打撃を与えている。モンタルトは、時々、彼の方法の秘密を読者に漏らす。蓋然的な意見について無知であることを彼が戦術として公言して、イエズス会の神父に説明するように誘うとき、彼は注釈をつけている。

ぼくは、神父さんが、うまうまと望んでいたとおりのわなに引っかかったのを見て、大喜びだった。その喜びのさまをわざと見せつけてから、蓋然的意見とは何かを説明してくれませんか

21) 6^e Lettre, LC. p. 101, cf. T. t. III. p. 124.

22) 5^e Lettre, LC. p. 88, cf. T. t. III. p. 105.

23) 5^e Lettre, LC. p. 89, cf. T. t. III. p. 106.

24) 5^e Lettre, LC. p. 91, cf. T. t. III. p. 107.

25) Cf. Toplis, *op. cit.*, pp.80-81.

かと頼んだ²⁶⁾。

モンタルトは定義することを頼んで、わなを仕掛ける。

神父さん、その〈現実の恩寵〉という言葉に、ぼくは引っかかるのです。

どうも余り聞き慣れない言葉ですからね。そんな言葉を持ち出さずに、同じ内容のことを説明していただけないでしょうか。そうしたら、たいへん有り難いのですけれど²⁷⁾。

eiron は彼の持っているあらゆる巧妙さを駆使して、alazon に喋らす。『プロヴァンシアルの手紙』ではイエズス会の神父が議論のきっかけを提供し、モンタルトが彼を質問攻めにする。イエズス会の神父はイエズス会の良心例学を詳細に、また、熱心に提供する。「第7の手紙」では、イエズス会の良心例学がスキャンダルの度合いが増してくる順序で、引用される。〈意志の導入〉の教えが紹介され、定義されたあとで、モンタルトは餌を仕掛ける。

あなたがたは、人間に対しては、物事の品のよくない実質面を許容し、神に対しては意志の霊的な働きを振り向けて、うまく釣り合いをとり、人間のおきてと神のおきてとを調和しようとしておられます。ですが、神父さん、本当を言いますと、まだちょっとあなたがたの請け合って下さったことが信じられないのです。あなたがたの会の本を書いた人達も、同じように言っているのかしらとと思っているのです²⁸⁾。

イエズス会の神父は餌に食いつき、イエズス会の良心例学の権威者の言葉を熱心に次々と示す。モンタルトはその議論をチェックして要約し、その意味を明らかにする。

神父さん。もうこれで、あなたがたの言われる意志の導きの原理は十分よくわかりました。ですが、それが及ぼす結果も知り尽くしたいのです。この方法によれば、どんな場合に殺人が許されるかもすっかり知りたいのです。誤解があってはいけませんから、あなたがたがおあげになった例をおさらいしておきましょう。こういう場合、あいまいにしておくのは、危険ですからね。人を殺してもよいが、時宜を得ており、正しい蓋然的意見に基づく場合に限る²⁹⁾。

モンタルトは議論を発展させる。

平手打ちを受けたら、剣を抜いて仕返しをしても、復讐することにはならないのだとおっしゃいました。しかし、神父さん、どの程度まで許されるとはお聞きませんでした³⁰⁾。

神父さん、名誉についてはなかなか拔かりなく手配がしてあるのがわかりますが、財産についてはどんな手も打てないのですか。財産が名誉ほど重要でないのは承知していますが、それはどうでもいいことです。財産を守るためにも、意志をうまく導けば、人を殺してもよいことになりそうに思うんですがね³¹⁾。

「そのとおりですよ」と認める神父を問い詰め、「イエズス会士はジャンセニストを殺すことができるか」という問題まで、イエズス会士が検討していることをモンタルトは引き出す。

「これはまあ、神父さん」と、ぼくは叫んだ。「なんとも驚くべき神学談義ですね。ラミイ神父の説によれば、ジャンセニストはもう死んだも同然ですね。」「そら、わなにかかりましたな」と、神父は言った。「彼は、同じ原則から逆の結論を引き出しているのですよ。」「それはまた、どう

26) 5^e Lettre, LC. p. 85, cf. T. t. III. p. 102.

27) 4^e Lettre, LC. p. 55, cf. T. t. III. p. 68.

28) 7^e Lettre, LC. p. 117, cf. T. t. III. p. 148.

29) 7^e Lettre, LC. p. 123, cf. T. t. III. p. 152.

30) 7^e Lettre, LC. p.123, cf. T. t. III. p. 153.

31) 7^e Lettre, LC. p. 123, cf. T. t. III. p. 157.

してですか。神父さん」。「というのは」と、彼は言った。「彼らは、私どもの名声を傷つけてはいないからです」³²⁾。

eiron は彼の餌食のむだな抵抗を冷めた目で、満足して観察している。

神父もこれには困ったらしく見えた。そこで、この難題を解決するよりも、避けて通ろうと考えたのだ。つまり、ぼくに対して、彼らのもうひとつの別な規則を持ち出してきたのだが、それはただ、混乱を増し加えただけのことで、ポオニー神父³³⁾の決定をなんら正当化するものではなかった³⁴⁾。

2) 劇

『プロヴァンシアルの手紙』では、大きなテーマを持った対話が劇を構成するまで高められている場合がある。次にその例を2つ挙げる。

(1) 「近接能力³⁵⁾追跡劇」

「第1の手紙」は、傑作『プロヴァンシアルの手紙』のなかの傑作である。この手紙は劇の形式をとって、「ソルボンヌで現在論議されている問題」を観客に知らせる。真相究明のため、「ぼく」は、次々と関係者を訪問し、やがて、意味不明の「近接能力」という言葉が鍵になっていることを知る。劇作家モンタルトは「近接能力」の意味を追究する。この劇はいわば、「近接能力」追跡劇である。まず第1に、ことの真相を知るため、まず、「ナヴァール学寮のスコラ学者」を訪ねる。つまり、アンチ・ジャンセニストの意見を聴く。

ことの真相を知ろうとして、ぼくはナヴァール学寮のスコラ学者のある先生に会いに行ったんだ。その先生は、ぼくの家の近所に住んでいて、

きみも知ってのとおり、ジャンセニスト反対派の急先鋒のひとりだ³⁶⁾。

「ナヴァール学寮のスコラ学者のある先生」から、説明を得てから、次いで、「ジャンセニストのある先生を訪問する。

その後、事件の核心がつかめたと思うと、とてもいい気になって、ある人のところに出かけたのだ。その人はますますお達者で、ご自分の義理の弟さんのところへ連れて行ってやろうとおっしゃるくらいのお元気さだった。その弟さんというのが、そうざらにいないパリパリのジャンセニストなんだが、なかなか気のいい人物でもあるんだ³⁷⁾。

再び、「ナヴァール学寮のスコラ学者」の先生のところへ、

ぼくも、すっかり安心し、初めの先生のところへ戻って、さもうれしように、ソルボンヌにもまもなく、平和が訪れますよ、間違いありませんと、告げたわけさ。つまり、ジャンセニストたちも、義人がおきてを果たす能力を持つという点では同じ意見だし、この点は請け合ったもしいし、場合によっては血の署名をさせてもいいといったんだ³⁸⁾。

「ナヴァール学寮のスコラ学者」の先生から「近接能力」という「今まで聞いたこともない言葉を聴き、もう一度、「ジャンセニストのある人」を訪ねる。

ぼくには、ちょっとやそつとで理解できそうにない言葉なんだからね。そして、忘れないうちにと、急いでさっきのジャンセニストの知人にまた会いに行き、あいさつを交わすなり

32) *7^e Lettre, LC*. p. 130, cf. *T. t. III*. pp. 160-161.

33) Etienne Bauny (1564-1649)、フランスのイエズス会士、クレルモン学院倫理神学教授。

34) *10^e Lettre, LC*. p. 173, cf. *T. t. III*. p. 222.

35) cf. 拙論、前掲書「プロヴァンシアル論争の起源と経過」(社会学部紀要第16号)

36) *1^{re} Lettre, LC*. p. 8, cf. *T. t. III*. p. 12.

37) *1^{re} Lettre, LC*. p. 10, cf. *T. t. III*. p. 13.

38) *1^{re} Lettre, LC*. p. 11, cf. *T. t. III*. p. 14.

すぐ、こう切り出したんだ³⁹⁾。

「ジャンセニストの知人」から、自分で確かめるよう勧められる。

ご自分で直接あの人達からお聞きになったほうが確かでしょう。私から紹介しましょう。ル・モワヌ⁴⁰⁾さんとニコライ神父⁴¹⁾とに別々にお会いになってみるだけでいい⁴²⁾。

まず、モリニズムに同調する「ル・モワヌさんの一人のお弟子さん」を訪れる。

「ジャンセニストの知人」があげた名前のなかに、やはりぼくの知っている人が何人かいた。そこで、ぼくは、この忠言を得たのをしおに、いいかげんにこの問題から足を洗おうと決心し、先生の家を出ると、まず、ル・モワヌさんの一人のお弟子さんのところへ行った⁴³⁾。

そこで、「義人たちは、神に助けを祈り求めるのに必要なすべてのものを持っていて、祈りのために新しい恩寵を全然必要としない⁴⁴⁾」という意見であることを知る。

次に、新トミストの「ドミニコ会士」を訪れる。

時間をむだにしないようにと、ぼくは、ドミニコ会士たちのところへ急ぎ、かねて承知の新トミストとされている人たちに問いかけた⁴⁵⁾。

新トミストとイエズス会士は、主張が異なるにもかかわらず、「近接能力」という意味不明瞭な言葉を用いることによって一致していることを知

る。モンタルトは叫ぶ。

何ですって、神父さまがた。それは、言葉の上のごまかしじゃありませんか。言っている意味は反対でも、共通の言葉さえ使っていれば同意見だなんておっしゃるのは⁴⁶⁾。

そこへ、「ル・モワヌのお弟子さん」が登場する。

神父さんたちは、黙ってしまって、ウンともスンともいわないのさ。そこへ、また、うまい具合に、先のル・モワヌさんのお弟子さんというのがやって来た。この偶然にはぼくも驚いたものだが、あとになって、連中はひんぱんに会っていて、ずっとなれあい関係だったことがわかった⁴⁷⁾。

モンタルトは、「ドミニコ会士」と「ル・モワヌのお弟子さん」の意見の相違点をつき、説明を求めると、「ドミニコ会士」の一人が、説明しようとする。「ル・モワヌのお弟子さん」はただちに、それを押し止めていう。

あなたがたは例のごたごた⁴⁸⁾を蒸し返そうとなさるんですか。私どもは、その<近接能力>という語の説明はしないこと、それがどういう意味かは明らかにせずに、双方ともがこの語を使うことで一致していたんではないんですか⁴⁹⁾。

最後に、モンタルトが断定する。

神父さまがたに申し上げます。本当を言えば、こういうことはすべて、まったくのごまかしじ

39) *I^{re} Lettre, LC.* p. 12, cf. *T. t. III.* p. 15.

40) Alphonse Le Moyne (1590 頃-1659) ソルボンヌの博士。

41) Jean Nicolai (1594-1673) ドミニコ会士、ジャコバン修道院々長。アルノー譴責に協力、ジャンセニウスを批判。

42) *I^{re} Lettre, LC.* p. 13-14, cf. *T. t. III.* p. 17.

43) *I^{re} Lettre, LC.* p. 14, cf. *T. t. III.* p. 17.

44) *Ibid.*

45) *I^{re} Lettre, LC.* p. 16, cf. *T. t. III.* p. 18.

46) *I^{re} Lettre, LC.* p. 17, cf. *T. t. III.* pp. 19-20.

47) *I^{re} Lettre, LC.* p. 17, cf. *T. t. III.* p. 20.

48) Cf. 拙論、前提書。社会学部紀要第16号, 1968年。

49) *I^{re} Lettre, LC.* p. 18, cf. *T. t. III.* p. 21.

ゃあないかと思わずにいられないのです。ですから、会議で何をお決めになり、譴責という手段をお出しになっても、ついに平和は実現しないでしょう。予言してよろしいですよ。(…)ソルボンヌの権威にとっても、神学の権威にとってもふさわしいこととは言えませんね⁵⁰⁾。

この「近接能力の追跡劇」は、舞台は次のようになり、『プロヴァンシアルの手紙』の読者にとっては非常に身近かなものであったであろうと思われる。

舞台 カルチエ・ラタン

第1景 ナヴァール学寮⁵¹⁾

第2景 カルチエ・ラタンのなか「急いでさっきのジャンセニストの先生のところへ」

第3景 ナヴァール学寮

第4景 ジャンセニストのところ

第5景 ジャコパンの僧院⁵²⁾

作者 演出 パスカル

彼は、舞台脇から、つまり、カルチエ・ラタンのすぐ近く⁵³⁾から見ている。

(2) 「盗賊に襲われた重傷の旅人」

「第2の手紙」には、「よきサマリア人⁵⁴⁾」からヒントを得たと思われるたとえ話を劇化したものがある。

このてんでばらばらな意見を抱え込んだ教会の姿を、ひとつ想像して御覧なさい。(…)そして、神から、あわれみをさずかり、その力に支えられて、無事に我が家へ戻ることができたのです⁵⁵⁾。

このたとえ話は、1幕6景の劇形式で表現されている。

第1景 「一人の旅人」が盗賊に襲われ、めった

打ちにされて傷を負い、半殺しのまま放り出される。近くの町から3人の医師が呼ばれる。

第2景 「第1の医師」傷口を調べて、致命傷だと診断し、消えゆく命を呼び戻すのは、ただ神だけがよくなさることだと、宣告する。

第3景 「第2の医師」は病人を喜ばせようとして、まだ家に帰りつけるだけの十分な力が残っているといい、自分の見立てと反対な第1の医師の悪口を言い、その評判を落としてやろうとたくらむ。病人はどうしていいかわからず、困ってしまう。

第4景 「第3の医師」は傷口をじっくりと調べ、初めに診た2人の意見を聞くと、第2の医師を抱き締め、これとぐるになり、2人で組んで第1の医師に反対し、とうとう恥知らずにも、第1の医師を追い払ってしまった。

第5景 病人は「第3の医師」の不信な態度と、あいまいな言葉づかいに不満をもらす。形の上だけで一致しているに過ぎず、内心は反対であるのに第2の医師とぐるになって、事実上一致している第1の医師を追っ払ったことを責める。

第6景 病人は、この2人を追い返し、第1の医師を呼び戻して、この医師にすべてをまかせる。彼の勧めに従って、自分は何の力もない身であると告白して、神に助けを乞い求める。そして、神から、あわれみをさずかり、その力に支えられて、無事に我が家へ戻る。

「第3の医師」(ドミニコ会士、新トミスト)は、「十分な恩寵」に関して、意味内容が異なるにもかかわらず、言葉の意味をゆがめて解釈して、「第2の医師」(イエズス会士)と組んで多数派になろうとし、「第1の医師」(ジャンセニスト)を追放する。しかし、やがて、「病人」は、「第2の医師」と「第3の医師」の診断に疑問を抱き、「第1の医師」を呼び返し、その診断と勧めに従う。

こうした劇形式が『プロヴァンシアルの手紙』

50) *1^e Lettre, LC*, p. 18, cf. *T. t. III*, p. 21.

51) cf. 注5)。のちに、Ecole Polytechniqueの所在地となり、現在、Ministère de la Recherche et de la Technologie, Collège Internationale de Philosophieの所在地。Rue Descartes.

52) 現在の Rue Saint-Jacques にあった。

53) かつての Rue des Franc-Bourgeois, faubourg Saint-Michel, 現在、45, rue Monsieur-le-Prince.

54) 「ルカによる福音書」x, 30-37.

55) *2^e Lettre, LC*, pp. 29-31, cf. *T. t. III*, pp. 37-39.

において採りいれられ、しかも、〈近接能力追跡劇〉のように、「第1の手紙」を傑作中の傑作にしているのは、バスカルのレトリックを考察する点で極めて興味のある点である。『プロヴァンシアルの手紙』で用いられた手紙や対話の表現形式が、『パンセ』に用いられていることは明白なことであるが、劇形式がどのように用いられているかという問題も考察に値することではないかと思われる。⁵⁶⁾

56) この問題は本稿では研究対象としていないが、『プロヴァンシアルの手紙』と『パンセ』の関係を考える点で注目したい。J. Lhermet は『パンセ』における le drame historico-théologique を指摘した (*Pascal et la Bible*, 1931, pp. 416-417. 拙論「バスカルの『パンセ』の神学思想」関西学院大学社会学部紀要第21号、1970年) が、最近では、田辺保教授が、「『パンセ』を劇として読む」において、『パンセ』の内的構造を劇という枠組みで考察する問題提起をしておられることに注目したい。